

NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

季刊

vol.

216

# 名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1  
TEL (052) 853-2655 FAX (052) 853-3636 <http://www.museum.city.nagoya.jp>

平成28(2016)年1月1日発行 (年4回1・4・7・10月)  
3,800部発行 無料 古紙パルプ配合再生紙使用

**特別展**

## 名古屋めしのもと

2015年12月12日(土)～2016年2月14日(日)

豆みそ、たまり。  
そして、あなたの思い出。

販売促進用の幕(右上)  
みそ煮こみうどん 三嶋屋(瑞穂区)  
愛知県味噌溜醤油工業協同組合製作  
合名会社中定商店(醸造伝承館)蔵

近年、観光資源として食文化に注目が集まり、各地でご当地グルメによる地域おこしもおこなわれています。ここ名古屋では、みそかつ、みそ煮こみうどんなど、「名古屋めし」と呼ばれる料理が人気を集めています。

ただ今開催中の特別展「名古屋めしのもと」では、名古屋めしの素(もと)となる豆みそ・たまりしょうゆを特集しています。また、ハレの日の食事・外食文化・学校給食など、思い出と結び付く名古屋の食文化を取り上げています。

毎日参加できるクイズラリーや給食ランキング、名古屋めし関係の商品を扱う売店などもあります。ぜひ会場にお越しください。

**観覧料金** 一般800(600)円 高大生600(400)円 中学生以下無料  
・( )内は20名以上の団体料金。  
・名古屋市交通局の一日乗車券、ドニチエコきっぷを利用してご来場の方は100円割引。  
・身体等に障害のある方は、手帳の提示により、本人と介護者2名まで当日料金の半額。  
・各種割引は重複して利用していただくことはできません。

**休館日** 月曜日(祝日の場合は直後の平日)、毎月第4火曜日、年末年始  
(12/14・21・22・28・31、1/1・4・12・18・25・26、2/1・8)

**主催** 名古屋市博物館 中日新聞社  
日本経済新聞社 テレビ愛知

**協賛** 東邦ガス株式会社 キッコーナ株式会社

展覧会の詳細や関連事業については  
名古屋市博物館ホームページをご覧ください。

# カンボジアの古代遺跡をゆく

カンボジアといえば、アンコール・ワット。それを中心とする、9世紀から始まったアンコール王朝の王都の遺跡をアンコール遺跡群といいます。そこにはまさにカンボジアの歴史が凝縮されています。

あまりにも有名なアンコールですが、実はカンボジアの古代王朝の歴史は、それよりも遥かに古い時代に遡ります。その始まりをご紹介します。

## それは海とメコンから始まった

カンボジアの初期王朝の名を、中国の歴史書は「扶南<sup>ふなん</sup>」と記載しています。古クメール語で「山」を意味するBnam（ブナン）の音を漢字に当てたものです。

扶南の始まりは1世紀頃、カンボジア現地の首長の娘（あるいは女王）が、早くから広範囲に海上交易網を発達させていたインド人と婚姻して成立した国と伝わっています。実際、考古学からも、扶南はメコン川下流域の沿海部に港湾都市をもち、南中国海とベンガル湾を結ぶ航路の中継基地として栄えたことがわかっています。また、扶南の都や寺院とみられる遺跡が、メコンデルタと呼ばれる、水運と水田耕地に恵まれたメコン川下流の広大な低湿地帯に分布しています。扶南は、インドの強い影響のもと、海上世界とメコンの流れに育まれたのです。

現地調査に行ってみて、メコン川下流域は、自然河川やクリークを含め中小の水路が網の目のように広がり、場所によっては一面が海のような、茫茫たる水の世界であることを実感しました。美しい青空と見渡すかぎりの水、青々とした穂を揺らす稲の風景に圧倒され、魂を揺さぶられる思いがします。季



メコンデルタの低湿地帯



水路から望むプノン・ダの遠景（正面の双丘の山）

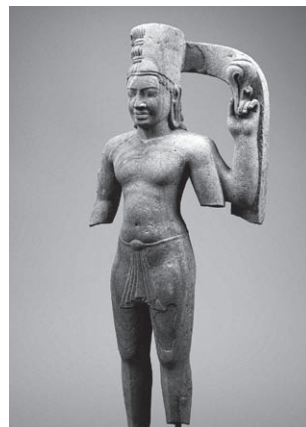
節が雨季ともなると、さらに広い範囲が水没し、舟なしには離れた場所を移動することができなくなるほどです。そして、その見舞<sup>みはる</sup>かす彼方に、6～7世紀の扶南の都、アンコール・ボレイと、その南方に位置する寺院遺跡、プノン・ダが姿を現します。



プノン・ダ山頂の祠堂

## 神々の楽園のはじまり

プノン・ダの山の中腹や麓からは、扶南時代に造られたカンボジア最古期のヒンドゥー教の神々の石像やレリーフが多数発見されています。その特徴には古代インドの彫像の強い影響がみられます。8世紀に扶南は、後にアンコール王朝を建てる「真臘<sup>しんろう</sup>」に滅ぼされましたが、そこで現れた神像彫刻は発展を経ながら、アンコール王朝に継承されました。メコンデルタに現れた扶南は、華やかな神々の楽園・アンコールの都にいたる歴史をひらく、原点だったのです。



プノン・ダ様式の神像

扶南からアンコール王朝の繁栄までをその彫刻美術でたどる特別展を、来年春頃、開催予定です。どうぞご期待ください！

（藤井康隆）



# 「本物」の重み

## — 出前歴史セミナー —

### 「合戦における火縄銃」を担当して—

名古屋市博物館では、市内の小学校へ出かけて行き、いろいろなテーマで歴史の特別授業をする出前歴史セミナーを行っています。

「合戦における火縄銃」、「名古屋の古墳」、「名古屋のまつりとからくり人形」、「火起こし体験」と4つのテーマ・プログラムがありますが、このうち、今年度の「合戦における火縄銃」での反応を紹介します。



出前歴史セミナー風景（写真提供：辻小学校）

セミナーでは、小学校6年社会科用教科書に出てくる「長篠の戦い」に絡めて「火縄銃」の話をします。次に博物館から持って来た「本物」の火縄銃を実際に持つ体験をしてもらいますが、火縄銃は3kgを超える重さのものもあります。きちんと持てるだろうか、落として怪我をしないだろうか、落ちたら火縄銃が損傷するのではないだろうか、と、まずは小学生の身の安全、次に大切な資料である火縄銃の保全、この2点に神経を使います。

もちろん、体験前に「持てないと思ったら、言ってください」と話すのですが、手を出さない子はまずいません。小学生の関心は手元の火縄銃に注がれていて、夢中です。

### 写真・動画と「本物」の違い

教科書や資料集には「火縄銃」の写真が掲載されていて、インターネットで「火縄銃」と検索すれば、パソコンの画面上に画像や動画が出てくる時代で

す。小学校6年生は、その形くらいは知ってはいます。火縄銃の持ち方も、目の前で例を示して、手を取って教えれば、すぐに理解します。ただし、実際の大きさ、ことにその重みは、自分の身体で感じてみて初めてわかる場合もあるのだということを、彼らから学びました。

楽々と火縄銃を持ち上げて構え「そんなに重くない!」と得意そうに口にする子もいれば、手にするなり無言で眉をひそめて首をひねり、「持ちあげられる?」と聞くと、おずおずと「無理…」と言葉にする子もいます。

いろんな反応が返ってきて、目を輝かせている子どもの姿を見ていると、胸の内があたたかくなってきました。

### 資料、モノ — 触れることのできる「歴史」 —

教室の机の上で、教科書の記述から「3000丁の鉄砲を使った」と学ぶ「長篠の戦い」を、「本物」の火縄銃を持つ体験を通して、本当にあった人間の歴史の一コマとして少しは感じてもらえるだろうか。そう思う時、モノ、資料を通して歴史に学ぶ博物館に勤務して良かったなとしみじみ思えてきたのです。

たとえば、「長篠の戦い」で使用された火縄銃の実数やその歴史上の意義は、新しい発見と研究の進展によって変化する可能性があります。現在、歴史を学んでいる小学生が親となった時、自分の子どもの教科書を手にとり、「長篠の戦い」の項目を読んで、自分の覚えている記述との違いに首をかしげることになるかもしれません。

しかし、もし、彼らの中に「子どもの頃に持った火縄銃、あれ、重かったなあ!」という記憶が残っているなら、それこそ生きた「歴史体験」なのだと思います。これは、資料、触れることができるモノがあればこそ可能な体験なのです。

人間は、長く生きてもおよそ百年。でも、資料は大切に保存していけば、それ以上の時を生きます。

出前歴史セミナーは、本物の資料を使う特別授業なので、実際に火縄銃を手にとり、その重みを感じることができる小学生の数は限られています。それでも、やはり、少しでも多くの子どもの歴史に触れてもらいたい。

子どもたちの反応を間近にして、こういう事業の大切さを改めて実感すると共に、博物館教育についても、考えさせられました。（塚原明子）



「奇跡の一本松」  
陸前高田市内

## 特別展

# 陸前高田の たからもの

2016年

2月27日(土)～3月27日(日)

休館日 2/29(月)、3/7(月)、3/14(月)、3/22(火)

※3/21(月・祝)は開館。

観覧料 一般300(400)円、高大生200(300)円

中学生以下無料

市内在住の65歳以上の方100(200)円

(敬老手帳等の提示が必要です。他の割引との併用はできません。)

※( )内は常設展との共通料金。

※名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用してお越しの方は50円割引。

※身体等に障害のある方は、手帳の提示により本人と介護者2人まで当日観覧無料。

※各種割引を重複してご利用いただくことはできません。

※30名以上の団体は割引があります。お問い合わせください。

主 催 名古屋市博物館、津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会

陸前高田市は、2011年3月11日に発生した東日本大震災によって、まちの中心部が津波に飲み込まれ、地域の歴史や文化の記憶を伝えるたからものである文化財にも大きな被害が及びました。この展覧会では、震災後に修復された資料から、まちの記憶を伝えるたからものである文化財を守っていくことの大切さを紹介します。

また、展覧会に合わせて、名古屋市が取り組んでいる震災復興支援とともに、被災地との交流のあゆみも紹介します。

## 陸前高田ってどこ？



陸前高田市

陸前高田市は、岩手県沿岸南部の宮城県との県境に位置するまちです。人口約2万人。美しい海と山を有し、「岩手の湘南」と呼ばれています。現在は、高田松原の松の中で、津波に耐えた「奇跡の一本松」をシンボルに、復興への歩みを進めています。

## 関連事業

### ギャラリートーク「たからものが語る陸前高田」

① 2月27日(土) ② 3月19日(土) ③ 3月27日(日)

特別展示室にて午後2時から開催。

【講師】学芸員 ※参加には観覧券が必要です。

### 被災地の今を伝える報告会 参加無料・当日受付

3月6日(日) 午後2時～名古屋市博物館B1講堂

12:30より整理券配布(定員220名)

東日本大震災の復興協力のために派遣された本市職員、陸前高田との交流を行っている学生などの報告により、被災地の今の姿を紹介します。

### 講演会「文化財再生にける思い」 参加無料・当日受付

3月12日(土) 午後2時～名古屋市博物館B1講堂

当日受付12:30より整理券配布(定員220名)

【講師】東京国立博物館特任研究員 神庭信幸氏(保存科学)



## ■ よみがえった「たからもの」

海水につかった文化財は、海水に含まれる塩分をはじめ、さまざまな物質に汚染されているため、急激に劣化する恐れがあります。救出された文化財には、まず劣化を止める「安定化処理」という作業を行い、そのうえで本格的な修理を行います。

文化財を救うために、全国の博物館関係者だけでなく、陸前高田市に住む人たちも力を合わせて取り組んでおり、陸前高田市内にあった56万点の資料のうち46万点が救出され、現在までに16万点が安定化処理されています。



「リードオルガン」  
陸前高田市立博物館蔵

陸前高田における幼児教育の先駆者村上斐さんが購入して、幼稚園で使われていました。海水をかぶり、オルガンの音の命ともいえる“リード”部分がさびているのではないかと心配されました。幸いにも、奇跡的にリードの損傷は少なく、修復によって、見事にその音色がよみがえりました。



「青い目の人形」  
陸前高田市立気仙小学校蔵

昭和初期、アメリカから友情の証として送られてきた「青い目の人形」。太平洋戦争の激化に伴ってその多くは処分されました。陸前高田市に残る“スマグニエル・ヘンドレン”ちゃんは、当時陸前高田市立気仙小学校に勤務していた先生によって物置に隠され、救われました。今回の津波で、傷がのこりましたが、その恐ろしさを後世に伝えるために、あえて過度な修復は避けられています。陸前高田の皆さんは戦争と津波から、まちのたからものを守り抜き、次世代に残す取り組みを行っています。



「アカショウビン」  
陸前高田市立博物館蔵

小学校の体育館の窓に激突して命を落としてしまったアカショウビン。はく製にして博物館に残すことに。以来、「元気にしていますか？」と尋ねられるほど博物館の人気者になりました。津波の被害で、首が折れ曲がってしまいましたが、見事に修復され復活。晴れて昨年東京国立博物館の展示に出張したのですが…。震災後に見学に来た小学生の一人が「アカショウビン、陸前高田に帰ってきますか？」と尋ねてきたとか。本当にみんなに愛されています。

## 東日本大震災からの復興と名古屋 部門展示室にて同時開催【入場無料】

特別展「陸前高田のたからもの」の開催に合わせ、名古屋市が、陸前高田市をはじめとする被災地で行っている復興への協力などの取り組みを紹介します。

### 「行政まると支援」

名古屋市では、東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市の行政全般を、丸ごと支援する取り組みを行っています。派遣された職員の奮闘ぶりなど、活動状況を紹介します。

### 「絆協定」

名古屋市教育委員会では、東日本大震災以降、陸前高田市と名古屋市の中学生どうしの交流を進めており、平成24年5月、「絆協定」を締結しました。双方の中学生の交流のあゆみを紹介します。

### 「宮古市との文化財交流」

名古屋市教育委員会は、岩手県宮古市での、東日本大震災からの復興に伴う埋蔵文化財発掘調査に対して学芸員を派遣し、遺跡の調査体制の充実に協力しており、それに伴い文化財交流も進んでいます。派遣された職員の活動とともに、宮古市の文化財を紹介します。

### 「名古屋市の防災の取り組み」

東日本大震災からの復興に対する支援・協力は、名古屋市市の防災について再確認する機会になっています。名古屋市市の防災への取り組みを紹介します。

## 文化財再生の現場

「陸前高田のたからもの」展では、陸前高田市立博物館で被災し、その後修復された文化財を紹介します。

東日本大震災の被災地では、今現在も日常生活もままならない環境の中でも、文化財の再生のために、日夜粉骨砕身して取り組んでいる人がたくさんいます。展覧会で、陸前高田市立博物館における文化財再生の現場の実情と、それに尽力している方の声を反映させるために、写真撮影と現地取材を行いました。

### 現在の陸前高田市立博物館

陸前高田市立博物館は、震災以前は海沿いの市街地にあったのですが、津波によって、甚大な被害を受けました。現在は、山奥の閉校した小学校へ暫定的に移転して、救出された文化財を修復し、長期的に安定して保管するために活動しています。



旧生出小学校に暫定的に移転している陸前高田市立博物館

### 漁撈具の修復作業

陸前高田市立博物館は地域の文化財を包括的に収集しており、その収蔵品は多岐にわたっています。その中でも特に重要なものとして挙げられるのが、広田湾で使われていた漁撈具のコレクション。このコレクションは漁撈具全般を網羅し、近代以降の漁撈技術の伝播や変遷について知ることができることから、平成20年（2008）には国の登録有形民俗文化財となりました。三陸地方一帯で多くの漁撈具が失われた今、資料の重要性は一層高まっています。漁撈具の修復は、博物館関係者のみならず、陸前高田市民である地元の漁師の力を借りて行われており、修復活動において彼らの協力は、重要な役割を果たしています。

今回はその取り組みを展覧会で紹介するために、漁撈具の修復を引き受けている村上覚見さんからお話を聞きました。村上さんは今では使われなくなった漁撈具の使用法を熟知し、さらに修復ができる、数少ない漁師です。「（漁撈具の修復は）人の手でやってきた仕事なのだから誰でもできる」と、話していましたが、博物館の学芸員は「覚見さんに技術を教わっても、覚見さんのように美しくできない」と、その技術の高さと伝承の難しさを感じているようです。

文化財を後世に伝えていくためには、修復するための技術を引き継ぐ手立ても同時に考えていかねばならないことを、村上さんに教えられました。同時に、博物館の復興には地域住民の方の文化財に対する熱い思いが欠かせないものであることを実感しました。



作業風景

村上覚見さん（中央）は修復の際、常に博物館の学芸員（左右）に修復の方針を確認しながら、作業を進めています。

### 現場に触れて

漁撈具の修復中「現在流通していない縄を、代替品でどのようにつくるか」という話題になりました。代替品の縄は、漁で使用していたものに比べ、色が異なり、質感も硬いものだそうです。これを染め直して、色を近づけた上で、独特の質感を近づけるために揉んだり引っ張ってみたりしているとのこと。文化財を「現状維持ではなく、完璧な状態で次世代に伝えていくのだ」という、強い信念を感じました。

現場に触れて改めて、修復技術だけでなく、文化財をよりよい形で次世代に伝えていこうとする、陸前高田の皆さんの思いを、展覧会を通じて届けたいと思うようになりました。そして、皆さんにとって、被災地とそこに生きる人に心を寄せていただける機会になりますよう、開催に向けて頑張ります。

（星子桃子）



# ある山車の来歴

## —大森天王車について

名古屋市内の山車について、それぞれの山車がいつ造られ、あるいはどこから譲られたか必ずしも明らかではない。いくらか資料のある守山区大森の山車「天王車」について、来歴を整理しておきたい。

大森の「天王車」は現在8月の第1日曜日に行われる大森天王祭に1輛だけ引かれる。大森には西島、

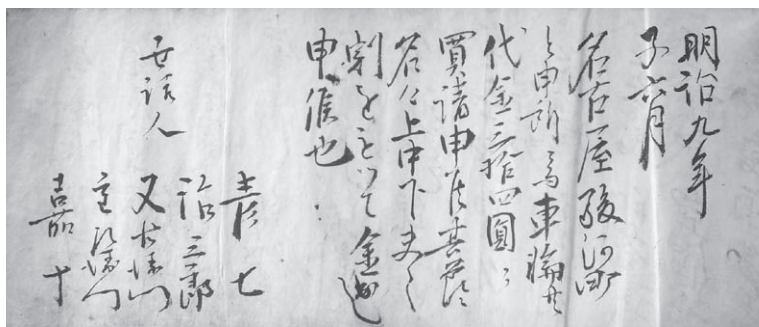


大森天王車

中島、東島、新田島、向島の五つのシマがあり、以前はシマごとに馬の塔・棒の手が出されたが、東島ではそれに加えて山車を出したのである。祭りを担った若い衆の組織が戦後なくなり東島だけで山車を維持することは困難と

なってくると、昭和38年（1963）にほかのシマも加わって、大森全体として維持運営にあたる大森天王祭山車奉賛会が設立された。

東島が山車を持つようになった経緯として『東春日井郡誌』（東春日井郡役所 大正12年）は次のように書く。昔大森に悪疫が流行したことがあり住民が苦しんだが、大森寺の住職が大八車を2輛連ね、葬式用白張の提灯をその上に多数点して疫病除けをなすべしと村の若者に引かせたところ、疫病はたちまち終息した。その後、年1回旧暦6月25日や悪疫流行の都度村内を引いたが、東島の有志が山車を買、大八車に代えた、と。



東島覚帳 大森東島蔵

さて、東島の有志が買ったという山車はどこのものだったのであろうか。小林元氏は『矢田川物語』（昭和55年）のなかで、最初の山車は名古屋の七間町から買い求めたといわれているがちょっと信じられない、としている。さらに、『東島覚帳』の明治9年（1876）に「名古屋駿河町と申所にて車輪の代金三十四円買請申候」とあることを紹介し、この車輪を山車の意味にとれば駿河町から買い求めたことになると、推測している。駿河町は現在の東区東桜一、二丁目あたりになる。

『東島覚帳』は出版されたものではなく、地元の区有文書である。このたび、大森天王祭山車奉賛会ほかのご厚意により、写真で見せていただくことができた。そこには「車輪共代金…」とあり、「三拾四円 車壹輛」との表現もある。小林氏は山車と断定することに慎重であったが、「車壹輛」とあれば山車と考えて差し支えないだろう。さらに、費用を分担した人々の名前が「上中下 夫々割をもって」最高20円から22銭まで、負担した金額とともに書き出されている。総勢94名は、前後の年の記述と照らし合わせると、東島の全戸数と考えて差し支えないだろう。

以上で大森村東島は駿河町から山車を購入し、それは明治9年であったことは確実となったが、まだ解けない謎がある。前掲の『東春日井郡誌』には「現今の山車は一度売り換へしものなり」とあり、『郡誌』の出された大正12年（1923）にはすでに2代目の山車になっていたというのである。そして長久手市前熊には名古屋市守山区大森から来たとか、名古屋市東区古出来町から買ったとの伝承がある山車が現存する（『長久手町史 資料編4 民俗・言語』平成2年 長久手町役場）。

大森東島では駿河町から買った山車を前熊に譲り、新たに山車を作るか購入したものであろうか。大森の山車について、『名古屋市内の山車と神楽民俗文化財調査報告書』（昭和56年 名古屋市教育委員会）では明治27年（1894）頃製作としており、

二層式で正面に一段下がった前棚を設け、外輪式の四輪を格子状の輪掛で囲み、その上に梶棒を取り付ける形式の、いわゆる名古屋型山車である。一方前熊の天王車は名古屋型に似るが、正面に前棚がないところが異なっている。これがもと駿河町の山車なのであろうか。今回の資料でそこまでは確認できない。新たな資料が待たれるところである。（田中青樹）

# 尾張徳川家家臣 中条家資料より 中条伊豆守康満宛 「位記」「口宣案」

尾張藩年寄（家老）を勤めた中条家の資料が寄贈された。これは、姻戚関係のあった能楽笛方の平岩家に伝来したものである。この中に初代当主康満が、正徳5年（1715）、従五位下伊豆守に任じられた際の文書が揃っており、江戸時代の大名家臣が官位を受ける際の状況を伝える好資料であるため、紹介する。

## 大岡越前守の「越前守」って？

江戸町奉行・大岡越前守といえば時代劇などでご存知の方も多いと思うが、この「越前守」というのは朝廷から任じられた官職である。これは古代の律令制に基づいており、越前守とは本来越前国（現在の福井県）の長官であるが、この頃には越前国との関係はなく、任務も特にない。朝廷の任命も形式上のものであり、実際には幕府が決定権を握っていた。これを武家官位といい、形式的な面もあるが大名や旗本の家格に繋がる重要な制度であった。

江戸時代の官位は「正（従）〇位」という位階と「〇〇（国名）守」といった官職が一体で考えられていた。家格によって官位も決まっており、例えば将軍であれば従一位左大臣、御三家は従二位権大納言（水戸家のみ従三位権中納言）を最高位とした。ほかの大名家も家格によって最高位が決められており、一般の大名や旗本は従五位下であった。

## 「位記」「口宣案」とは

官位の叙任は古式に則った形で行われるため、「従五位下」という位階と、「伊豆守」という官職は別々

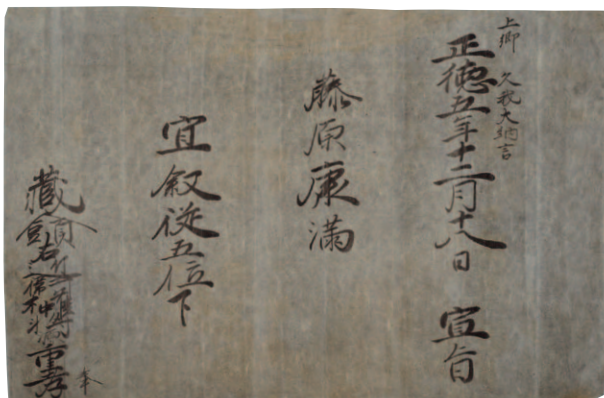


写真1 中条康満叙従五位下口宣案

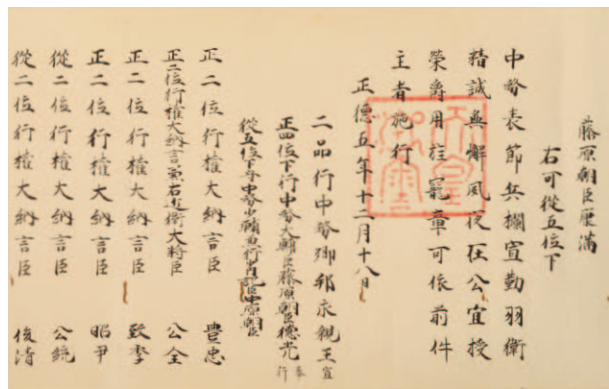


写真2 位記（中条康満叙従五位下）

の文書で伝達され、位階については「位記」と「口宣案」、官職については「宣旨」と「口宣案」という4通の文書が朝廷内で作成される。

「口宣案」（写真1）は天皇に仕える蔵人頭が、叙任の担当者である公家の上卿に叙任を命じる文書で、本来は口頭で伝えられるものだが、覚として文書が作成されるようになったものである。写真1では、宿紙とよばれる墨付きの紙を再び漉き直した独特の紙が用いられている。

口宣案を受けて「位記」「宣旨」が作られる。「位記」（写真2）には天皇の印である「天皇御璽」が据えられ、これによって位階が本物であることの証明となる。「宣旨」は天皇が官職を命じるものである。しかし江戸時代には、叙任を受ける側が「伊豆守」などの官職を決めていたため、天皇や朝廷が関与する余地はなかった。

## 尾張徳川家家臣にも官位が与えられていた

官位は大名や旗本に与えられるが、御三家など將軍家の分家と加賀藩については例外としてその家臣（陪臣）にも官位が叙任された。これは家臣その人ではなく藩に対して与えられ、藩の中で誰を任じるかについては、藩主が決めていた。

尾張藩では成瀬・竹腰など幕府から配された付家老や年寄が選ばれている。中条家は公家の堀川家を祖とし幕府の高家も勤めていたが、中条康満が徳川光友の小姓に取り立てられ、以後尾張中条家として分家した。藩の年寄も勤め、江戸と名古屋を頻繁に行き来するなど、藩政の重要な役割を担っていた。

江戸時代の武家の官位は幕府が主導権を握っているため、「位記」「口宣案」といった文書は形式的なものであるが、中条家にはこの4通の文書全てが伝わっており、写しも作成されている。官位を得ることが、家格の形成に影響し、家の維持においても重要であったことがわかる。（長澤慎二）